

**農業女子 PJ メンバーとの
食料システムサミットに関する意見交換会概要
(2021 年 4 月 13 日)**

1. 農業女子 PJ メンバーの SDGs 取組紹介

(1) 大津愛梨 (NPO 法人田舎のヒロインズ)

- ・熊本県南阿蘇村において、家族農業で、環境保全・資源循環型農業に取り組んでいる。
- ・農業体験やホームステイを恒常的に受け入れ、田舎の楽しさや魅力の情報発信も常に実施。
- ・世界農業遺産 (GIAHS) の認定活動に積極的に参加し、阿蘇の農業が作ってきた景観や生態系を国内外にアピール。
- ・農作物とエネルギーの両方を作ることができるのが農業であり、再生可能エネルギー生産・普及活動にも取り組んでいる。
- ・一方で女性農家はエネルギーについて知らない場合も多いため、ワークショップやオンライン講座を通じた情報発信に取り組んでいる。
- ・女性ならではの取組として、地域の風景写真をプリントした服を着るファッションショーを実施。
- ・次世代育成活動として、子供たちによるファーマーズマーケットの開催や、考える力を鍛える場づくりに力を入れている。
- ・防災・減災活動としてカフェを開店。太陽光発電の利用、バイオマストイレの設置、ペレットストーブの使用等を促進。
- ・熊本地震後はレストランバスを招致し、農業と観光の両方を同時復興することにも取り組んだ。
- ・子育て支援ネットワークづくりやハワイでのビーチ清掃を通じた国際交流なども実施。
- ・コロナ禍においては、大学に通えない大学生が農村で、オンライン授業の合間に農業を行う、「休学しない留学」をサポート。
- ・農業×教育、農業×観光、農業×環境など、女性農業者としてやれることをやっていくと、SDGs の全てのゴールに関連する具体的な取組につながると伝えたい。
- ・家族農業なくして持続可能な農業なしと考えている。

(2) 金丸晴美 (ハーブガーデン平田)

- ・富山県小矢部市で、農薬及び化学肥料なしで栽培したハーブを、ハーブティー入り浴剤に加工して販売。

- ・薬草ガーデンを日本中に広めること目標としており、ハーブが広まることで、日本中の人々が元気になると考える。また予防医療の観点から、薬草に寄り添う暮らしが、最終的に国の医療費削減にもつながると考える。薬草ガーデンの見学会や体験教室を実施。
- ・また、子どもたちに園芸体験してもらうことを目標にしている。土や植物に触れることで、子どもたちの豊かな感受性を育むことができる。NPO法人において、子どもたちのための薬草ガーデンを設置。地域の小学校で授業を受け持もっている。
- ・現在の取組として、異業種交流の場への参加やワークショップを開催。
- ・今後は、地域の問題を話し合い、解決するような場を作りたい。また、地域の食は地域で生産すべきと考えるため、生産者と消費者をつなぐ場を設けたい。
- ・全国各地の農業者が自らの強みを活かし積極的に教育に参画することが必要だと感じる。食育や職業体験に取り組むことで技術の発信にもつながると思う。

(3) 斎田綾華（みやぎ斎田農園）

- ・宮城県の大崎耕土で、夫婦で減農薬・無農薬の米や野菜を栽培。
- ・牡蠣やワカメの養殖に伴って生じる牡蠣殻やワカメの芯、昆布の端材等を肥料として循環利用する取組を実施。自身の実家が漁業を実施しており東日本大震災で被災。この時支援してくれた人々への恩返しの想いで開始。
- ・原風景を残したいという想いから、現在では殆ど採用されていないが、強風に強い穂仁王式の天日干しという稻の干し方を採用。
- ・現在は米全体の4%しか栽培されていないが、懐かしさや童心を思い出させる品種としてササニシキを栽培。
- ・子どもたちのために農業・漁業体験を実施。海の幸、山の幸、里の幸、旬などを知ることで、自立後の選択肢が増えると確信。
- ・一次産業と家庭をテーマにした循環型農業モデルを構想中。幼いころに出会った漁師の方が言った、山から川を通じて流れ込む栄養分が海を豊かにすることから海と山を繋げて環境保全を考える「山は海の恋人」という言葉が現在の活動につながっている。農業から漁業へ何かを与えることや、林業との連携なども進めたい。
- ・フードロス対策や、町の緑化にも取り組みたい。
- ・ササニシキを家庭に売り込むため、米粉のホットケーキミックスの製造を開始。ニッチな農家にとって、個性的な取組の継続のためには販路拡大が最も重要。

(4) 藤井美佐（卵娘庵ひよこさんちの直売所）

- ・岡山県で100%の鶏の平地平飼いを実施。6次化の認定を取得。

- ・SDGs15 に関連した、「鶏ファースト」の取組を実施。養鶏業界は大量飼育がスタンダードだが、あえて平飼いを選び付加価値を創出。あわせて、有精卵の商品化も実施。
- ・SDGs 4 に関連し、若手農業者と農業高校の生徒が交流する場や、農業高校生徒が若手生産者から、農作物の販売方法を学ぶ販売研修を実施。
- ・SDGs 8 に関連し、新しい社風を取り入れるため、トヨタと連携し、業務改善に取り組んでいる。また、女性リーダー塾へ参加し経営の勉強を行い、コミュニティリーダー塾の中で、リーダーシップについて学んでいる。
- ・コロナ禍において、卵製品の販売も行う直販カフェをオープン。自社製品のファンを増やすため工夫している。BtoB のようなビジネスモデルではなく、ファン to ファンのモデルを画策。
- ・今後も引き続き、アニマルウェルフェアの推進や、安心・安全な加工品の提供に取り組む。また、農場 HACCP の取得や、観光農園、次世代育成などの取組も実施していきたい。

2. 意見交換

Q 日本の特色と、世界に貢献できるもの

- ・ドイツ（欧州）と日本では栽培する農作物と気候の違いがある。ドイツは、一般的に生態系も貧相で、栽培できる作物に限りがあり、大規模で画一的な農業。一方、日本では多様な作物が栽培可能。また、ドイツにおける女性農業者の割合は日本に比べ非常に低い。日本では農業法人の中で、女性が経営に参画すると売り上げが伸びるという結果がある。この傾向は、女性の立場が低いアジアの中では特異。このような中で日本は、女性が経営のパートナーであることや、女性に向いている作業、女性の視点を取り入れた商品開発など、女性にできることをアジアや世界に示していくことができると考える。

Q 地域で活動する中で、国や自治体に求める支援

- ・学校での園芸教育等の活動は殆どボランティアで行っている。対価が支払われるようになれば、参入が増えると考える。

Q 震災から今の活動に至るまで、特に記憶に残っていること

- ・福島原発事故による風評被害により、販路が狭まってしまった。同じ県内で高濃度のセシウムが検出された影響は5年から6年は尾を引いた。正確な位置関係を理解せず、実際に放射能が検出されていない地域であるにも関わらず、購入がキャンセルされることもあった。

- ・漁業の面で言えば、海水温が過去10年で2度上昇したことで、従来の養殖が難しくなってきてている。ササニシキについても、熱さや寒さに弱いことから、危機感を持っている。

Q 家族経営農家の社長として、特に苦労した点

- ・家族経営農家において、女性が給料を貰えていないケースが多くある。原因として、夫が経営を行っているため分からない、ということが挙げられる。女性も経営を学び、自分の支払われるべき給料を知る必要がある。また、夫側の教育も必要。加えて、女性農業者同士のつながりやネットワークが大事だと感じる。

Q 農協役員や農業委員における女性の割合について数値目標が設定されているが、役員等になる際の阻害要因や、必要なサポート等。

- ・女性自身が、女性は外に出ていくことができない、外に出ていくべきではないという意識を持っている場合があるため、まず女性の意識改革が必要。また男性の女性に対する理解や意識改革、子どもたちに対する正しい教育が必要。
- ・家庭の中での発言権を高めてくことが課題。農業は就業年数が長くなかなか世代交代が行われないことから、女性の夫もいつまでも親の言いなりになっている。また、女性がまだまだ声を上げづらく、自身が意見を述べると反対されるが、夫に言ってもらうと話が通るなど、夫を介してではないと意見を言えない環境を変えて行く必要。
- ・女性割合の向上のため、女性を農業委員会に入れなければいけないので入ってくれ、と誘われて農業委員になった者を知っているが、委員になっても意見が全く通らないと聞いた。
- ・これからは人口減少や気候変動など上の世代が経験したことのない環境で農業を行うことになり、女性がその答えを持っているかもしれない。しかし、地域の話し合いなどで女性が新しいことを発言すると、男性側は否定されたように捉えてしまうため、夫を通して発言する。まずは女性が思い立った時に農業に参入できるよう、農業体験を体系化するなどの取組を通じて間口を広げることが重要。
- ・農業女子のメンバーや、農業にしっかり従事している女性を、一般企業の社外取締役や役員とマッチングする仕組みがあればいい。一般企業にとっても女性農業者という得難い視点を取り入れることができる。

以上